

8 利用者の情報行動

筑波大学図書館情報メディア研究科講師

松林麻実子

I. 大学図書館における「利用者」

- 大学図書館がサービス対象とすべき「利用者」とは
 - 研究者（院生を含む） or 学部生
 - 大学図書館における「学部生が中心」という意識
- 利用者実態調査の対象としての「研究者（院生を含む）」
- 利用者教育の対象としての「学部生」

II. 利用者を理解する枠組

- これまで実施されてきた利用者実態調査
 - レファレンス・サービスの理解の延長
 - 目の前にいる利用者が、図書館をいかに利用し、何を期待するか
 - 自由回答式による直接的な表現を望む
 - 図書館利用を独立した行為としてとらえる
- 社会的行為としての「図書館利用」
 - 「図書館をいかに利用しているか」ではなく、「人々が日常生活（研究活動）の中で、いかに図書館を位置づけているのか」を知る
 - 他の要素、代替物との関連を考慮する
 - 様々な情報源をいかに使い分けているかを考える

III. 医学研究者の情報利用行動

- 2003年調査
 - 物理学・化学・病理学の三分野の利用動向はほぼ同一
 - 研究者にとっての学術情報とは「学術雑誌論文」
他のメディアは学術雑誌論文にとって代わるような存在ではない
 - 電子ジャーナルが普及
 - 「ほぼ毎日利用」(24.8%)、「週に1回以上利用」(37.0%)
 - 「図書館への来館」から「ウェブ閲覧」へ
- 2007年調査
 - 日本の医学部80大学所属研究者2,033名を抽出、回収率32.4%
 - 論文を読む形態
 - 「印刷版そのまま」(17.0%)、「印刷版のコピー」(12.3%)
 - 「EJを印刷して」(53.2%)、「EJを画面上で」(9.4%)、「EJ画面+印刷」(8.2%)
 - 印刷版・電子版いずれであっても図書館を経由して入手したものを読んでいる

- 普段利用する検索手段
 - 「PubMed」(87.7%)、「サーチエンジン」(62.2%)、「図書館」(69.7%)
 - 「雑誌ブラウジング」(73.7%)
- オープンアクセス文献の利用（複数回答）
 - 「PMC」(53.9%)、「オープンアクセス雑誌」(37.8%)、「無料提供サイト」(15.2%)
 - 「使ったことがない」(16.9%)
- オープンアクセスに対する認識
 - 「理念に賛同するが行動は変えない」(41%)、「理念に賛同し行動も変える」(37%)
- オープンアクセスの実施
 - 「PMC」(19.2%)、「自身のウェブサイト」(1.2%)、「機関リポジトリ」(2.3%)

IV. 歴史学研究者の情報利用行動

● 2008年調査

- 日本の大学に所属する歴史学研究者 1,357 名を抽出，回収率 40.0%
- 研究活動に利用する資料
 - 「文献資料」(96.3%)、「学術雑誌」(93.9%)、「学術書」(89.1%)
 - そのうち最も重要な資料は「文献資料」(71.4%)
- 情報入手手段（複数回答）
 - 「文献資料」の入手は「他機関に出向いての閲覧・複写」(42.1%)
 - 「学術雑誌論文」の入手は「図書館で必要ページのみ複写」(38.2%)、「図書館で現物を閲覧」(21.3%)
- 情報検索手段（複数回答）
 - 「文献資料」を探す際は「学術雑誌や学術書の脚注」(92.4%)
 - 「学術雑誌論文・学術書」を探す際は「学術雑誌の巻末目録」(80.9%)、「大学図書館 OPAC」(73.3%)、「国立国会図書館 OPAC など」(56.4%)
- 情報検索の頻度
 - 「ほぼ毎日」(17.1%)、「週に 1 回以上」(53.6%)、「月に 1 回以上」(23.6%)
- 図書館への来館頻度
 - 「週に 3 回以上」(21.5%)、「週に 1 回程度」(47.3%)、「月に 1 回程度」(17.6%)
- 電子ジャーナル利用頻度
 - 「時々利用」(29.5%)、「過去に利用」(21.3%)、「利用したことがない」(37.3%)，
 - 「電子ジャーナルを知らない」(3.7%)
- オープンアクセスおよび機関リポジトリに対する認識
 - 「知っているし，登録したこともある」(13.2%)，「知っているが，登録したことはない」(21.5%)，「よく知らない」(64.0%)

V. まとめ

- 研究者の情報利用動向と図書館
 - 自然科学系研究者の多くは電子的に検索を行い、図書館が提供している電子ジャーナルを利用して、必要な文献を入手している
 - 人文科学系研究者は研究に必要な資料のうち、学術雑誌論文および学術書を図書館で入手する傾向にあるが、入手先である図書館および学術情報流通全般に対する関心が極めて薄い
- 機関リポジトリの構築・運営に向けて
 - 研究者全般に「知られていない」
 - 広報の際のポイント

【参考文献】

- 2003年調査（物理学，化学，病理学）
 - 松林麻実子，倉田敬子．e-print という情報メディア：日本の物理学研究者への調査に基づいて．日本図書館情報学会誌．Vol51, No.3, 2005, p.125-140.
 - Keiko Kurata et al. Electronic Journals and Their Unbundled Functions in Scholarly Communication: Views and Utilization by Scientific, Technological and Medical Researchers in Japan. Information Processing & Management Vol.43, p.1402-1415, 2007.
 - 倉田敬子．研究者にとっての学術情報流通の電子化とオープンアクセス．[シリーズ・図書館情報学のフロンティア No.7] 日本図書館情報学会研究委員会編．『学術情報流通と大学図書館』．東京，勉誠出版，2007.
- 2007年調査
 - 倉田敬子ほか．日本の医学研究者の電子メディア利用とオープンアクセスへの対応．2007年度三田図書館・情報学会研究大会予稿集．
 - 倉田敬子ほか．電子ジャーナルとオープンアクセス環境下における日本の医学研究者の論文利用および入手行動の特徴．Library and Information Science. (accepted for publication)

利用者の情報行動

2009-07-10
平成21年度大学図書館職員長期研修
松林麻実子
(筑波大学図書館情報メディア研究科)

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

1

利用者を「理解する」とは

- ◎ 「(目前の)利用者が抱える問題を知り、それを解決する」ための理解
 - レファレンス・サービスのアナロジー
 - 「感情」「個別の状況」に焦点
- ◎ 「サービスを設計する」ための理解
 - 「全体的な傾向」「行動パターン」に焦点
 - 個別の状況は可能な限り捨象する

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

22

大学図書館における「利用者」

- ◎ 「研究者(院生を含む)」
 - 利用パターン(情報源、ニーズ)の確立
 - 研究領域との関連
- ◎ 「学部生」
 - 研究領域・専門知識に関する知識がない
 - 予測不能な動きをする
- ◎ どちらを対象にサービス設計をすべきか?

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

3

対象は「研究者」

- ◎ 「学部生が中心」という意識
- ◎ 学部生はどのような利用をするか?
 - 「場所としての図書館」を利用(試験前の勉強スペース)
 - パワープレイで問題解決(全てサーチエンジンで検索)
 - 講義で指定された課題のために利用(行動様式は教員の指示に基づく)
- ◎ 研究者の行動を「サービス設計」の参考に
学生の行動を「利用者教育」の参考に

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

4

従来の利用者調査における意識

- ◎ 質問紙調査が有効
 - 利用者調査はすでに何度も実施されてきた
- ◎ レファレンス・サービスの理解の延長
=目の前にいる利用者が、図書館をいかに利用し、何を期待するか
- ◎ 自由回答式による直接的な表現を望む
- ◎ 図書館利用を独立した行為としてとらえる

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

5

社会的機関としての図書館

- ◎ 「図書館をいかに利用しているか」
⇔ 「人々は日常生活(研究活動)の中で、いかに図書館を位置づけているのか」を知る
 - 他の要素、代替物との関連を考慮する
 - 必要とする情報の形態は?
 - 様々な情報源をいかに使い分けているか?

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

6

2003年調査・調査概要

- 2003年2月実施、質問紙郵送調査
- 調査対象の選定
それぞれの領域に対応する学部を持つ
国内主要大学
NII『研究者ディレクトリ』より抽出
- 対象分野と回収率
 - 物理学（回収率54.3%）
 - 化学分野（回収率48.1%）
 - 病理学分野（回収率42.4%）

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

7

2003年調査・調査概要

- 調査票内容
- 化学、病理学（計25問）
 - 学術メディアの利用
 - 電子ジャーナルの利用
 - 成果公表メディア
 - それぞれに対する研究者の意識
- 物理学（計29問）
 - +e-print archiveの利用と意識

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

8

2007年調査・調査概要

- 日本の医学部等を持つ大学に所属する
研究者2,033名
 - 医学部等のある80大学の主要講座に所属し、
ウェブ上で氏名が公開されている研究者
 - 各大学約100名をリストアップ
 - 大学ごとに1/4ずつ抽出
- 質問紙郵送調査（29問）
 - 2007年2～3月実施
- 回収率32.4%（651件）

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

9

2008年調査・調査概要

- 2008年3～4月実施
- 質問紙郵送調査
- 歴史学分野
 - 「日本史」「西洋史」「東洋史」「考古学」
- JST「研究開発支援総合ディレクトリ」より抽出した1,357名を対象
- 調査項目
 - 学術メディアの利用、電子ジャーナルの利用
 - それぞれに対する意識
- 回収率（40.0%）

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

10

調査結果の位置づけ



平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

11

分析の観点

- 研究者にとって「情報」とは
 - 研究者の情報入手と図書館
 - 情報検索
- ⇒ 「今後の動向」という話に結びつける
今回は「IR」「OA」に対する認識には
触れない（後日の講義で出てくるので）

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

12

自然科学系研究者にとっての「情報」

2003年調査・化学分野(複数回答)

学術雑誌論文(印刷版)	92.5%
学術雑誌論文(電子版)	73.0%
大学・研究所のサイトにある論文	15.2%
会議論文(電子版)	2.3%
著者のサイトにある論文	5.8%
プレプリント・サーバ	4.6%
その他	0.6%

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

13

学術雑誌の圧倒的優位性

◎学術雑誌に匹敵するメディア

(2003年調査)

- 匹敵するものはない(25~40%)
- 物理学 e-print archive (41.3%)
- 病理学 大学・研究所のサイト (35.6%)

◎学術情報を入手するためのメディア

「学術雑誌」(印刷版・電子版問わず)

cf.特許への注目

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

14

電子ジャーナルの普及

◎2003年調査・3分野の場合

	化学	病理学	物理学
毎日利用	19.5%	24.8%	15.0%
週1回程度利用	45.5%	37.0%	40.4%
月1回程度利用	13.5%	10.5%	15.2%
こくたまに利用	11.2%	14.8%	14.0%
利用しない	10.0%	12.0%	12.7%

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

15

個人購読の傾向(2003年調査)

◎「個人購読」をやめた雑誌がある
「はい」の割合

物理学(21.1%) / 化学(22.2%)
病理学(27.5%)

◎重要なジャーナルについては、
学会員になるなどして、個人で入手

自分に一番近いところに置きたい
と思うジャーナルに変化はない

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

16

電子ジャーナルへのアクセス

(2003年調査・物理学)

図書館の電子雑誌リストから	45.6%
ブラウザに登録してあるURLから	35.8%
サーチエンジンで雑誌名を検索して	4.8%
学会や機関のサイトからリンクを たどって	10.5%
Webで偶然見つけたURLから(不定期)	1.4%
無回答	1.9%

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

17

雑誌論文の入手形態(2003年調査)

	EJ導入前	EJ導入後
印刷雑誌のまま	10~20%	
印刷版雑誌複写	80~90%	10~20%
PDFをDL・印刷		60~70%

(3分野の回答を統合)

- 電子ジャーナルを「複写」感覚で利用
- 画面に表示させるだけでは見づらい

平成21年度大学図書館職員長期研修:利用者の情報行動

18

読む論文の形態（2007年調査）

印刷版雑誌をそのまま	17.0%
印刷版を複写して	12.3%
電子ジャーナルを画面上で	9.4%
電子ジャーナルを印刷して	53.2%
電子ジャーナルを画面で見て、印刷	8.2%

- ・2003年調査とほぼ同様の傾向
- ・「画面上で読む」が2割を超える調査結果も（Tenopir）

平成21年度大学図書館職員長期研修-利用者の情報行動

19

読む論文の入手経路（2007年調査）

- 印刷雑誌そのまま（17.0%）
 - 購読雑誌（63.9%）／図書館雑誌（33.7%）
- 印刷版のコピー（12.3%）
 - 購読雑誌（13.3%）／図書館雑誌（75.0%）
- 電子ジャーナルを画面上で（9.4%）
- 電子ジャーナルを印刷して（53.2%）
- 電子ジャーナルを画面で見て印刷（8.2%）
 - いずれも8割前後が図書館経由で入手

平成21年度大学図書館職員長期研修-利用者の情報行動

20

情報検索のツール（2007年調査）

	週1回以上	内1日複数回
PubMed	87.7%	18.0%
サーチエンジン	62.2%	15.7%
図書館	69.7%	10.6%
雑誌ブラウジング	73.7%	5.1%

⇨優勢なデータベースがない分野の動向

平成21年度大学図書館職員長期研修-利用者の情報行動

21

情報検索ツールに関する研究

- 英国における研究者への電話調査（2006）
 - 研究のための情報源を探す際に何をを使うか
 - 最も多い回答は「サーチエンジン」
 - 非常によく利用59.7%／定期的に利用24.3%
- Hemmingerら（2005）
 - 情報を探す際に最も重要なツールは何か
 - 書誌データベース（47%）／Google（30%）
- 電子ジャーナルログ分析
 - SpringerLinkへのアクセス（2005）
 - 書誌DB・図書館（20%）／SE（15%）

平成21年度大学図書館職員長期研修-利用者の情報行動

22

自然科学系研究者の情報行動

- 情報といえば「学術雑誌論文」
- 大半は電子ジャーナルを利用
 - 印刷版雑誌をそのまま読むのは個人購読者
- 論文入手に関して図書館に依存
- 「情報検索」行動の一般化
 - ライフサイエンス系はPubMedが圧倒的
 - Googleの位置づけは？

平成21年度大学図書館職員長期研修-利用者の情報行動

23

歴史学研究者にとっての情報源

	利用する情報源 (N=539, MA)	最も重要な情報源 (N=539, SA)
史料	96.3%	71.4%
学術雑誌	93.9%	3.3%
学術書	89.1%	3.3%

- ・「現物を所有すること」「自ら出かけて行って閲覧、複写すること」が重要
- ・史料探索のために「学術雑誌論文・学術書の脚注」を利用

平成21年度大学図書館職員長期研修-利用者の情報行動

24

学術雑誌・学術書の入手手段

図書館で必要ページのみコピー	38.2%
図書館で現物を閲覧	21.3%
定期購読誌をブラウジング	18.7%

(N=539, SA)

学術雑誌論文の入手に関しては図書館に依存

平成21年度大学図書館職員長期研修: 利用者の情報行動

25

学術雑誌論文・学術書の検索

●情報検索ツール（複数回答）

- 学術雑誌の巻末目録（80.9%）
- 大学図書館OPAC（73.3%）
- 国立国会図書館OPAC（56.4%）
- サーチエンジン（40.3%）

●情報検索の頻度

- ほぼ毎日（17.1%）／週に1回以上（53.6%）
- 月に1回以上（23.6%）

平成21年度大学図書館職員長期研修: 利用者の情報行動

26

図書館への来館頻度

週に3回以上	21.5%
週に1回程度	47.3%
月に1回程度	17.6%

- 来館頻度は自然科学系より高い
- 厳密に「研究活動のための来館」と言い切れない

平成21年度大学図書館職員長期研修: 利用者の情報行動

27

歴史学研究者の情報行動

●“Only One”を志向する

- もう少し個別に見ていく必要性あり
- そもそも質問紙調査になじまない？

●流通する情報量が少ない、速度が遅い

●電子的な資料に対する不信感

- EJ出現直後の自然科学系研究者と同じ反応
- 現物を苦勞して閲覧・入手が行動原則

●学術情報流通全般に対する関心の薄さ

- 被害者意識（対・大規模大学、自然科学系）

平成21年度大学図書館職員長期研修: 利用者の情報行動

28

（無理を承知で）将来予測

●e-Scienceの出現

- 学術雑誌論文を必要としない
- データ共有のためのプラットフォーム
- ⇨（従来）成果公表を必要としない特殊な領域

●Google+機関リポジトリの発展

- 「何でもあり」の中から取捨選択が常識？
- ⇨図書館の関与

平成21年度大学図書館職員長期研修: 利用者の情報行動

29

図書館の影響力

●機関リポジトリ+Googleの普及

- 教材、報告書、データなども含む
- = 灰色文献の発見可能性の飛躍的向上

●研究者の情報入手経験の蓄積

Google検索⇒多様な形態の情報入手

●学術雑誌の優位の現状が変化する可能性

平成21年度大学図書館職員長期研修: 利用者の情報行動

30